

空手道詳説（23）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その5. 薩摩藩支配下の琉球）

（2）薩摩藩の出陣

① 出陣までの経過

1606年（慶長11年）江戸幕府が開かれ、守護大名から初代薩摩藩主となった島津家久（1576～1638年）は、京都伏見城にいた徳川家康（1543～1616年、徳川幕府初代将軍、将軍在位：1503～05年、以後は大御所）に対し、『琉球は近年無礼が多いので出兵したい』旨を申し立て、家康の承認のもとに琉球侵攻の準備に取り掛かっていたのは事実である。しかし、家久は1608年9月には、琉球国に薩摩大慈寺の僧・龍雲を遣わして、尚寧王に対し家康に恭順するように諭すが、三司官の一人である謝名親方は龍雲を罵倒して辱める行動により、両者の関係はかえって悪化してしまった。

これを聞いた家久は、琉球は従順ならずと判断したための陳情であり、徳川家康は遂に島津家久に対し琉球征伐の朱印状を下した。

② いざ出陣へ

琉球国の正史「中山世鑑」には「己酉の乱」（きゆうのらん。つちのととり年の乱の意味）と記され、日本側では征縄役（せいじょうえき）と呼ばれるこの戦役は、1609年（慶長14年）2月6日（以後、月日は太陰暦による）鹿児島湾入口の山川港（現・指宿市）に集結し、総大将に樺山久高、副大将に平田増宗を据え、軍兵総数3000人余、軍船100艘をもって山川港の結集し、藩主・島津家久の閲兵を受け、順風を待って3月4日に琉球へ向けて出港し



遥かに桜島を臨む現在の山川港

た。

③ 奄美大島到着

翌3月5日には、口永良部島に到着し翌6日に船団は南下、7日には当時琉球国の領土だった奄美大島の笠間湾に入港した。

奄美大島の首脳は、この情勢をいち早く読み取り、琉球王を見限り全面的に薩摩に協力する意向を表明したため、戦闘は起らなかった。

更に8日には、大島の笠利に民衆が集まっていると聞き、兵が周辺を巡察したが集団は存在せず、民衆はことごとく山林に逃げ隠れしていた。そこで山林から人民を呼び集め、抵抗なくば安堵してよいと伝え、戦いは無く治まった。

ところが、3月10日に琉球王府は薩摩軍が奄美大島に到着した知らせを受け、降伏を申し入れるべく天龍寺僧の以文を派遣するが、降伏どころか薩摩軍と接触すらできなかった。一説によればだが、以文は薩摩軍を避けて途中で行方をくらましてしまい、後日現れ琉球王の勘気を被ったと薩摩側の記録にあるという。

④ 徳之島に向かう

3月16日、薩摩軍船の内13艘が徳之島に先行した。これに対し島民は果敢に抵抗したが、速やかに制圧された。

ところが同島の内、湾屋湊に8艘が入港すると、島民1000人ばかりがこれを取り囲み戦いを挑んだため、下船した薩摩軍は鉄砲を撃って撃退を試みるが、やむなく50人ばかりが殺害された。

その後3月20日早朝、秋徳湊に3艘が軍機をなびかせて入る。

秋徳湊古戦場跡（明治時代の写真）



薩摩軍の侵攻経路図と日付



ここでは徳之島第3代島主の東之主（ひぎゃのしゅ）が治めていたが、息子で掟役（村主）の佐武良兼（さぶらがね）とその弟・思呉良兼（めぐらがね）の兄弟は激しく抵抗した。二人は人々を指揮して先頭に立って奮戦、兄弟は棍棒を持ち、手下の百姓たちは竹槍や煮えたぎった粥でもって果敢に接近戦を挑む。一時薩摩軍を海に追い込む勢いであったが、日向庄内の丹後守という武将が見事な狙撃によって佐武良兼を射殺した後は薩摩の形勢有利となり、島民6人の死者と薩摩軍にも同程度の被害（生死不明）が出しながら鎮圧された。戦国時代を生き抜いた歴戦の雄、槍刀ばかりか鉄砲を備えた薩摩軍に対し、余りにも幼稚な戦闘器具をもって立ち向かう島民は、哀れと切り言いようがない。但し、薩摩軍にしても、奄美諸島を制圧さえできるなら、余分な殺害はしない方針だったこと分かる。20日には本隊も秋徳湊に到着した。徳之島は闘牛で有名なところであり、年間を通し熱狂した大会が開かれ、観光の中心となっている。また、出身者には柔道家の徳 三宝（1887～1945年）、第46代横綱・朝潮太郎（1929～88年）がいる。

⑤ 沖永良部島に向けて

21日には、総大将の樺山久高を含む10艘のみが、奄美大島と沖縄本島のほぼ中間に当たる沖永良部島に向けて先航した。

残った兵士は徳之島の山狩りを行った。王府から派遣されていた与那原親雲上という役人は、島民の難儀抵抗を余所に山中に逃げ隠れていたところ、22日に発見されて生け捕りとなっている。もう琉球側は全て逃げ腰となっていること分かる。

残りの軍団は24日午前中に出発、日没頃には沖永良部島に到着し、総大将樺山と合流した後、夜を徹して沖縄本島へと向かった。

港漂着したところを島民の攻撃を受け、首領の掟兄弟は

4月12日に薩摩軍は奄美大島へ上陸して制圧、4月26日（3月22日）に徳之島、4月28日（3月24日）に沖永良部島を次々と攻略し、4月30日（3月26日）には沖縄本島北部の運天港に上陸、今帰仁城を落として首里城へ迫った。尚寧は止む無く和睦を申し入れ開城した。島津軍は5月8日（4月5日）に首里城を接收し、4月半ばには薩摩に凱旋帰国した。

① 薩摩軍の出陣

7日には琉球国が統治する奄美大島に到着したが、抵抗もなく従った。琉球国府では、薩摩軍の奄美大島到着の知らせを受け、降伏を申し入れる動きもあったが、使者はその任を果たさず接触できなかった。

3月16日に先陣が徳之島に出向き各地で抵抗を受け戦闘も繰り広げるが、王府役人も捕え制圧した。抵抗した島民の武器は、棍棒や竹槍などであったから、薩摩の鉄砲の前に成すすべがなかったと思われるが、薩摩も無傷ではなかった。

沖縄本島に近い沖永良部島を経て3月25日夕刻、薩摩軍は北部の今帰仁運天港に到着した。薩摩軍は、翌27日今帰仁城に行くが落ち延びて無人であった。

この頃、首里王府では和睦のため西来院（那覇にある臨濟宗の寺）の菊隠宗意（生年不詳～1620年）を使者として要請したが、高齢を理由に辞退する。菊隠は琉球人で、首里の円覚寺で得度、後に日本に渡り京都南禅寺などで修業し、琉球に帰って島津氏との外交に携わり、島津義久、義弘、家久との親交もあった。首里円覚寺の第18代住持を務めたが高齢を理由に西来院に隠居していた。

第7代尚寧王から重ねて召し出されて要請を受けたため、国恩に報いるべく決意し受諾した。

はたして菊隠たち雄志の人たちは、国難をいかに凌げるのか。多難の前途が待ち受けていたのであった。

明は豊臣秀吉の朝鮮征伐において朝鮮国に大規模な援軍を送った事による莫大な出費で財政難に苦しみ、破滅寸前まで追い込まれ、海を渡り他所の国まで援軍を送る余裕はなく、江戸幕府による琉球征伐を知っていたとしても、見て見ぬふりをしていたと思います。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行